

2015年7月19日 第三主日礼拝

説教「神さまの喜び、私たちの喜び」

サムエル記第一 15章 10-23節

【聖絶】

今日の箇所では聖絶、つまり敵対する民族の全滅が問題になっています。聖書の中でも私たちが首をかしげる箇所の筆頭です。神さまがそんなことをお命じになるなんて・・・と、できれば読み飛ばしたいようなところですよ。

けれども、神さまが聖絶をお命じになるのは、相手が、イスラエルと神さまの関係を脅かす場合のみ。関係を脅かすというのは、イスラエルを武力で攻めてくるだけではありません。偶像礼拝を持ち込む危険も問題にされています。ですから、近くの民族は聖絶の対象になっても、遠くの民族は、聖絶されませんでした。

このとき、神さまには二つの道がありました。どちらかを選ばなければならない。ところが、どちらも痛みをとまいません。一方には、アマレクを聖絶してしまうという道。「男も女も、子どもも乳飲み子も」とあります。愛である神さまが、そのようなことを平気でなさるはずはありません。

しかし、もう一方の道はさらに大きな痛みをとまいません。もしアマレクを聖絶しないなら、やがてはアマレクがイスラエルを滅ぼすこととなります。そんなことになったら、イスラエルを通して世界を贖うという神さまのご計

画が、途切れてだめになってしまう。アマレクを失うか、世界を失うか、どちらも選びたくない選択の中で神さまは世界を選ばれました。痛みの中で歯を食いしばるかのようにして選ばれたのです。御子イエスをくださった神さまです。ご自分のためであれば、だれの犠牲もお求めにはならなかった。けれども、世界のために、このときはアマレクを犠牲にしなければならなかったのです。

【悔いる神さまと叫ぶサムエル】

ところが、サウルは神さまに従いませんでした。乳飲み子が可哀想だからといって殺さなかったのではありません。逆にサウルは乳飲み子を殺して、アマレクの王を残しました。ひょっとしたら、隠してある宝を渡す、と持ちかけられたのかもしれませんが。こうしてサウルは、神さまの痛みを無にしました。神さまがアマレクのために感じられた痛みにはまったく思いをめぐらすことをしないで、ただ、自分の利益のために神さまに背を向けてしまったのでした。

神さまは「わたしはサウルを王に任じたことを悔いる」(11)と言われました。サウルが良い王であることを望んでおられ、そのためにあらゆる助けを与えた神さま。それなのに、サウルは神さまの愛を軽んじました。神さまは、このことを悲しまれ、深い痛みをお感じになりました。

「サムエルは怒り、夜通し【主】に向かって

叫んだ」(11)とあります。サムエルには、神さまの痛みがわかりました。そして、傷つけられた神さまのお心を思って怒りました。サムエルは、神さまの痛みや喜びを、たいせつにしました。どうしたら神さまによるこぼれるだろうか、それがサムエルの心を占めていたのです(22)。

【安息日】

なぜサウルは、神さまに従わなかったのでしょうか。サウルの生涯のさまざまなきごととに共通しているのは、神さまを喜ぶ体験の乏しさです。サウルは、神さまが私たちを喜んでくださる神さまであることを知らなかったのです。

私たちはそうではありません。神さまを喜んでいて、さらに喜ぶことを求めます。とりわけ安息日はたいせつです。この日は、「ふだんの生活を捨てて、神さまに私たちをもう一度創造する許可を与える」日です。「神さまに許可を与える」という言い方は強烈ですが、神さまは私たちを無理やり休ませることをなさいません。私たちが、自分を神さまにゆだねるときだけ、神さまは私たちをもう一度創造して下さることができるのです。ですから、私たちは週に一度、日常の仕事から離れる必要があります。

サウルも、神さまと過ごすことの喜びをしっていたら、と思います。7日ごとにもう一度創造されていたら、と。それは、神さまが私たちをそのようにお造りになっているからです。